

## 山伏に擬せられたイエズス会士

—— とある啓蒙思想家から見た日本<sup>1)</sup> ——

小俣ラポー日登美\*

朝鮮の麗しき姫君、アジェニー（Agénie）は思い悩んでいる。と言うのも、彼女が愛する許婚のオキマ（Okima）は、日本の「在俗皇帝（Empereur séculier）」タイコ（Taiko）の長男で跡取りだと言うのに、良からぬ宗教を信奉しているようだ。ただ彼は、タイコが朝鮮にやって来た時に、狼藉者から彼女を救ってくれた命の恩人なのだ。オキマの弟タンマ（Tamma）は、兄に比べると随分聡明な男性に見える。実は彼もアジェニーのことを密かに愛しているのだが、そんなことはおくびにも出さず、中国からやってき哲人宰相のイルマジス（Ilmagis）を何かと頼っていて、宰相の引退を引き止めている。そして皇帝とオキマの周辺では、アミダ（Amidas）とシアカ（Siaka）を信じるボンズ（Bonzes）と、ボンズのライバルでカミ（Camis）を奉ずるジャマボ（Jammabos）が暗躍している。愛憎渦巻く宮廷での三角関係、仏教と修験道と儒教とおぼしき信仰の三つ巴の競争、そしてタイコ退位後の権力の行方はいかに…。

もし仮に18世紀に書かれたフランス語の演劇作品『レ・ジャマボ、あるいは日本の僧（*Les Jammabos ou les moines japonais*, 以下レ・ジャマボ<sup>2)</sup>』（1779）が映画やドラマにでも翻案されれば、（面白いかどうかはさておき）このような筋書で宣伝されるのは間違いないだろう。管見の限りでは、この作品を単独で研究対象とした純粋な文学研究は存在しない。そのことから、これまでのこの作品に対する一般的な文学的評価については、想像にお任せする。ただし、この作品を歴史学の視覚から検討すると、18世紀後半のヨーロッパにおける日本像について興味深い一側面が照射される。実際『レ・ジャマボ』は印刷部数が多く、当時は多少の反響も見られた。その創作の経緯、出典、イエズス会演劇の主要なテーマを逆手にとった演出は、当時の日本像だけでなく、啓蒙時代のフランスの知的・哲学的環境と、そこでこの劇が果たしたであろう役割について、貴重な手がかりを与えてくれるものである。本稿は、特に思想史・宗教史の視覚から本作品を位置づけ、そこに展開される内容や主張の文化的な背景を理解しようと試みる。そのために、京都大学人文科学研究所中川文庫に蔵されているコレクションに立脚し、その蔵

---

\*おまたらばー ひとみ 白眉特定准教授

書を利用しながらその分析を行うこととする。

## 1. 作者と出版地の謎

『レ・ジャマボ』には、タイトルと年号のみが記入され、その作者と出版地は明示されない。しかし、ヌーシャテルに保存されている一冊には、その作者を示唆する年代不詳の手書きの書き込みが残されている<sup>3)</sup>。ヌーシャテル蔵の『レ・ジャマボ』は、未装丁で仮綴状態のままだが、本体は傷んでおらず紙の保存状態も良い。大きさは縦 21 センチ、横 13 センチほどで、八つ折り版である。本来アンカット本であったように見えるが、ページの全てがカットされており、少なくとも一度は読まれた形跡がある。図書館の整理のために記入された記号番号以外で、唯一の書き込みは、扉ページに見られる。(現代における図書館の整理のために記入された記号番号は、鉛筆でなされている一方で、この書き込みはインクでされているため、それ以前に遡るだろう。) ここには、「フノイヨ・ド・ファルベールによる (par Fenouillot de Falbaire)」とある。

本そのものには、どこにも出版地の記載がないが、『レ・ジャマボ』はヌーシャテル出版協会 (Société typographique de Neuchâtel, 以下 STN) によって少なくとも 1208 部印刷されたことが分かっている。これは、ヌーシャテル公立大学図書館保存の STN 関連の写本群内の資料から確認される<sup>4)</sup>。STN は、啓蒙主義、プロテスタント、無神論的思想に関連する多くのテキスト、すなわち風俗紊乱、治安攪乱的と思われた書物をフランスで出版・配布する役割を担っていた<sup>5)</sup>。当時の文脈では非常に破壊的な内容を持つとみなされたこの種の文学は、程度の差こそあれ、フランスへの輸入が定期的に禁止されていたため、地下の流通網を通じ秘密裏にフランスで普及した<sup>6)</sup>。

ヌーシャテル公立大学図書館保存の STN 写本群には、当時 STN から刊行された書籍が、いつ、どのような職業の人物から注文され、どこに、何冊輸出されたのかを細かに記録した歴代の帳簿がほぼ完璧な形で残されている。STN で印刷される書籍のうち、注文される冊数は多くても数十冊であることがほとんどで、1000 冊を超える単位で書籍が一度に注文されることは、この『レ・ジャマボ』を除いてほぼ見当たらない。この印刷部数は、極めて異例のことであったと言える。というのも、15 世紀に活字印刷術が始まって間もない時代では、一版に刷られる部数は平均 300 部内外であり、18 世紀の半ばになっても、一版が 600 部を越す場合はまれであったと指摘されているからである<sup>7)</sup>。

この大量の部数の注文者の名前は、シャイエ・ダルネ (Chaillet d'Arnex) で、職業はメートル・ブルジョア (maître-bourgeois)、すなわち市民評議会のメンバー、と STN の帳簿にはある<sup>8)</sup>。この資料に見えるシャイエ・ダルネなる人物は、正式名が、ジャン=アンリ・シャイエ・ダルネ (Jean-Henry Chaillet d'Arnex, 1735-1807) で、1767 年にヌーシャテルの 24 人議会

(Conseil des vingt-quatre) のメンバーをすでに務めていたことで知られる<sup>9)</sup>。シャイエ・ダルネはまた、1784年以降は、STNの出版ストラテジーに大きな決定権を持つようになっていた<sup>10)</sup>。つまり、ほぼSTNの経営に与していたヌーシャテルの名士である。

ただし、このうちダルネが自分の名前で注文した1208冊のうち、実際に入手していたのは、(おそらく自分で頒布する目的で手に入れた) わずか28冊に過ぎない。400冊は、ヌーシャテルから35キロほど離れた場所にある村レ・ヴェリエール (Les Verrières) の書籍商ギヨーム・ペレ (Guillaume Perret) の手に渡っていた<sup>11)</sup>。レ・ヴェリエールは、フランスとのほぼ国境上に位置する街で、町のスイス側にある部分の呼称である。スイスで印刷されフランスに密輸された書籍は、この村で運搬人に受け渡され、フランス側のポンタルリエまで、山道を越えて人足に背負われて行った。このルートは、STNに関する広範な研究を行ったロバート・ダーントンがかつて「ポンタルリエ・ルート」と名付けたもので、スイスからフランスへのもっとも重要な禁書供給経路の一つであった<sup>12)</sup>。つまり『レ・ジャマボ』も、フランスにおける読者を想定して大量に印刷されたと見て間違いないだろう。(ただし、1208冊のうちのこりの780冊がどのように使われたのかは、STNの資料には明記されていないため分からない。)

## 2. ファルベール：同時代の評価が芳しくないマイナー作家

ところが、『レ・ジャマボ』は、パリはおろかフランスのいかなる街においても上演されることはなかった。と言っても、全く本文に作者の名前が明示されていなかったわりには、パリとその周辺の知識人に良く読まれていたようである。例えば、ジャン・フランソワ・ド・ラ・アルプ (Jean-François de La Harpe, 1739-1803) は、以下のような厳しい批評を下している。

『レ・ジャマボ』というタイトルの悲劇が、ここ(パリ)では多少なりとも密かに、しかし非常に寛容に配給されています。この作品は、イエズス会亡き後の風刺とでもいうべきもので、その結果、(イエズス会が解散させられた現在) その目的(の達成)ははるかに実り少ないものとなっています。イエズス会がなくなった時になって、その修道会が行ったかもしれない悪事を寓話的に描くことは、むしろ徒労のように思われます。このプロジェクトは、イエズス会が影響力を奮っていた時代(に書かれていた)方が良かったでしょう。しかも、その(風刺としての)効果はきわめて弱く、計画性も個性も面白みもなく、作風はきわめて凡庸です。しかし、ごくありきたりになっているような考えを表現したような箇所でも、表現が悪くないところはいくらかあります<sup>13)</sup>。

ラ・アルプは、この批評の後に、一応『レ・ジャマボ』の紆余曲折した筋書きの要約を付け加

えている。実際イエズス会は、他国に先がけフランスにおいては、ポルトガルに続き1763年に追放されている。そして1773年には、全世界において解散させられた<sup>14)</sup>。『レ・ジャマボ』が刊行された時点で、イエズス会は公式にはすでに存在しない団体であったのは事実である。

この批評執筆時、ラ・アルプは本当の作者の名前を知らなかったようである。この謎は当時の文学界、思想界を多少賑わせた。実際、他の批評では、時にはラ・アルプよりも好意的に受け止められている<sup>15)</sup>。

パリの演劇界を鋭く観察していたフリードリッヒ・メルキオール・フォン・グリム男爵(Friedrich Melchior von Grimm, 1723-1807)は、1780年2月、友人のドニ・ディドロに宛てた手紙の中で、より詳しい情報を伝えている。そこでグリムは、悲劇『レ・ジャマボ』に言及し、これをカトリック教会の修道士、特にイエズス会に対する中傷であるとの理解を示している。また、イエズス会の解散後に出版されたため、作品の諧謔的な側面が失われてしまったこと、さらに文体や筋の貧弱さなど、文学作品自体としてはいくつかの弱点があることをグリムは指摘する。一方で、グリムはこの作品に部分的には素質を見出し、一応の評価も与えている。この題材の潜在力を認めた上で、それにもかかわらず『レ・ジャマボ』作者は、『マホメット、あるいは狂信 (*Mahomet, ou le Fanatisme*)』(1741年)においてヴォルテールが発揮したような天才の域に達することができなかつたとし、それが惜しいとすらみなしているのだ。確かに、その内容は明らかにヴォルテールの影響が、多くの部分に感じられ、19世紀の研究では、このテキストはヴォルテールの模倣であると考えられていたほどである<sup>16)</sup>。最後にグリムは、『レ・ジャマボ』の編集者が大量の部数を配布させたが、どれも売れなかつたと認めたという事実に触れている<sup>17)</sup>。この情報は、STN資料に残る前述シャイエ・ダルネによるフランスへ向けた大量部数の頒布の痕跡と符号する。しかし、現在ほぼ無名のこの作者が、なぜ当時は曲がりなりにもヴォルテールと比較の対象となるような評価を得ることができたのだろうか。

ヌーシャテル本『レ・ジャマボ』の扉に記入されたフヌイヨ・ド・ファルベールは、正式名をシャルル・ジョルジュ・フヌイヨ・ド・ファルベール・ド・カンジェー (Charles Georges Fenouillot de Falbaire de Quingey, 1727-1800) と言う。フランスのフランシュ・コンテ地方出身で(この点は『レ・ジャマボ』の執筆背景において後述するように重要になる)、『レ・ジャマボ』発表の時点で、すでにいくつかの劇作品を書いていたが、全体として評判は芳しくなかつた。特筆すべき例外が、処女作の『紳士的な犯罪者、あるいは周知された無実 (*L'Honnête Criminel ou l'innocence reconnue*)』(1767年)である。『レ・ジャマボ』と同様、この作品も宗教的悲劇に基づく寛容の賛美をテーマとしていたが、『紳士的な犯罪者』は、プロテスタントの迫害という実際に起こった時事的なテーマに基づいていた。これには、父親の身代わりとして、1756年に宗教上の理由からガレー船送りになったニーム在住のジャン・ファーブル (Jean Fabre) の苦悩が描かれている。この劇はかなり成功し、当局に禁止された後、ヴォルテールの賞賛を

受けた<sup>18</sup>。この「成功」を受けて、ヨーロッパのいくつかの国でも上演されるなど、国外でも好評をきした。

しかし、これに続くファルベールの第二作『二人の守銭奴 (*Les Deux Avarés*)』は、すでに先述の批評家グリムをはじめとして、同時代の文芸評論家らからは全体的に不評であった。それどころか、作者の知性が疑われるほどの失敗作であった<sup>19</sup>。さらに、1776年にコメディ・フランセーズで上演された『風俗教室 (*École des mœurs*)』が大失敗したことで、ファルベールの劇作家としてのキャリアは一旦潰えることとなった<sup>20</sup>。したがって、この『レ・ジャマボ』は、『風俗教室』失敗の3年後に書かれた、作家としての起死回生を狙った野心的作品と言えるだろう。しかし、この作品もコメディ・フランセーズで上演されることはなく失敗に終わった。この後のファルベールの文筆活動については知られていない。

実は、ファルベールの唯一の成功作である『紳士的な犯罪者』は、ファルベール単独の創作ではなく、この時代を代表する思想家であるドニ・デイドロとの共同作業の結果生まれたものであった。1768年には、ドニ・デイドロはロンドンの出版業ギャリック社に宛てて書いた手紙で、この演劇について熱心に提案を行った。この書簡でデイドロは、この戯曲のフランスでの上演が不可能であるため、イギリスでの上演を提案している<sup>21</sup>。

ファルベール自身は、あまり知られていないが、『百科全書』に三件の論文を寄稿するなど、いわゆる百科全書派の啓蒙思想家の末席にまがりなりにも身をおく存在であった<sup>22</sup>。上記の書簡等も考慮に入れると、ファルベールとドニ・デイドロの間には、深いとは言えないにせよ永続的な友情（というよりも、むしろ知的な交友関係かもしれない）が、ある程度存在したとは言えるだろう。デイドロがギャリックに宛てた手紙の内容からは、プロテスタントの影響を受けて宗教的寛容を擁護する劇を書くというファルベールの考え方の大筋が読み取れる。

### 3. 啓蒙主義のヨーロッパにおける密かな出版物と中川文庫

デイドロとファルベールの関係は、かつてロバート・ダーントンが鮮やかな筆致で描き出したダランベールと三文文士（パンフレット作者）ラ=センヌの関係を彷彿とさせる<sup>23</sup>。STNのようなスイスの印刷業者は、フランスに書籍の販路を開拓したいと強く願い、また「確実に売れそうな」文章を書いてくれそうな、著名な啓蒙思想家の原稿の入手を切望していた。それこそデイドロやダランベールと言った人物の作品である。それに目をつけたフランスの無名の文士たちは、自分と著名な文士の関係を匂わせ、様々な出版物の企画や、書籍の販路のアイデアを提供する姿勢を見せながら、スイスの印刷業者から何かと資金や本を巻き上げようとした<sup>24</sup>。その無心の様子は、STNの書簡資料に色濃く刻まれているのである<sup>25</sup>。

そして、ラ=センヌのような文士によれば、「一番よく売れたのは禁書」であった<sup>26</sup>。つまり

未だ無名の文士にとって、当局に検閲され禁書のレッテルを貼られることは、一種の名誉であった。ファルベールの『紳士的な犯罪者』の成功に見られるように、逆に衆人の耳目を集め、文学作品としての評価を得る近道でもあった。だからこそ、起死回生の作品であった『レ・ジャマボ』もあえて作者名・印刷所名を無記にして「禁書」風の体裁をとることで、一定の啓蒙的知識人層への宣伝効果を狙ったのだろう<sup>27)</sup>。確かに、後世の資料や、本稿で後述するドイツ語訳の序文にも、『レ・ジャマボ』が禁止されたことは書かれている。しかし、このような検閲に言及した公文書の痕跡を見つけることはできない。

このような地下に潜った文書、現代人にはもはやほとんど顧みられない書物に、多大な興味を示していたように思われるのが、中川文庫の収集者であった故中川久定教授である。中川文庫は、すでに本稿で引用したような18世紀のフランス語の貴重書籍が1200点以上存在するばかりでなく、現代の研究書も多数含まれ、その一部には中川氏生前中の書き込みが激しく認められるものもある。どうやら中川氏は、一部の本に関しては読書カードなどではなく書籍自体に独自の印を書き込むことでメモ代わりにしていたようである。一般的に大事な場所には、定規で丁寧に線が引かれ、気になる単語は丸で囲まれる。さらに大事な場所は、定規で四角く囲まれ、大事な箇所が多いページには、ページ番号に二重線が引かれている。場合によっては、書籍内のメモの主要項目が箇条書きで本の見返し(効き紙)の部分にまとめられて、書物内のメモの目次の役割を果たしている。

STNの資料を多用して執筆されたロバート・ダーントン著の『革命前夜の地下出版』と『猫の大虐殺』には、特にメモが多く、中川氏のSTN資料への深い関心が伺われる<sup>28)</sup>。前者のメモにおいては、偉大な啓蒙思想家に成りきれず、無名のフィロゾーフとして終わる「哀れな男」たちの世界、すなわち「知的地下世界の深淵」に関する多くの記述に印が施されている<sup>29)</sup>。その上で、「18世紀のフランス人は、今日18世紀フランス文学と呼ばれているような作品を読んでいたのだと考えるのは、安易すぎる」という指摘へもマーキングがされている<sup>30)</sup>。実際、パリと比較すると文化的には後進地域とされていた地方都市においても、現在等閑視されているような書籍が、密輸されて売られ、よく読まれていたことをダーントンは指摘している。その上で、必ずしも現代の教科書で取り上げられるような偉大な啓蒙主義者らの名著が、当時良く読まれたベストセラーではなかったという現実を鋭くついている<sup>31)</sup>。

これらのメモに反映された知見は、おそらく中川文庫が収集される過程での書籍の選択に影響を与えたのではないかと考えられる。中川文庫の目録を作成した王寺賢太氏は、中川文庫を評して、中川氏が専門とするデイドロ関連の蔵書の充実ぶりが特に目を惹くとした<sup>32)</sup>。ただし、それだけでなく、実際には現代においては注目されて来なかったような作品も多数収集されているのである。例えば、スイスから頻繁に密輸されていたような類の風俗小説もあれば<sup>33)</sup>、啓蒙思想家の著作とは対極を成すような護教的な書物、そして広義での「(複数形の)インド」へ

の旅行記・見聞記は多数含まれる<sup>34)</sup>。その中には例えば、後述するエンゲルベルト・ケンペルの有名な日本旅行記のフランス語訳や、明治期に『西教史』の訳語で日本でも普及した、イエズス会士ジャン・クラッセの著名な『日本教会史』も見られる<sup>35)</sup>。また、コレクションの中には、スイスで印刷されて密輸され、フランスで流通したと思われる書籍も含まれる。残念ながら、その中に稀観本である『レ・ジャマボ』は見出されないが、『レ・ジャマボ』は確実に中川文庫に体现されたような書籍のネットワークの中に位置づけられるのであり、またその中で読まれるべきなのだろう。

#### 4. イエズス会を風刺する『レ・ジャマボ』

『レ・ジャマボ』の作品の副題は、『アンリ 4 世の魂に捧げる悲劇、そして歴史的考察』である。この作品の冒頭には、アンリ 4 世への献辞があり、この演劇を通じた著者の主張の全貌を要約している。曰く：

最も王らしく、最も優れた人であるあなた、全ヨーロッパに親しまれているその名は、今もあらゆるフランス人を温かな気持ちで感涙させ、すべての心に司祭たちの狂信や修道士たちからの攻撃の記憶を呼び覚ます。罪を犯した修道士たち、そして狂信者で残酷な司祭たちに対抗して作られたこの作品を、どうかあなたに捧げさせてください！<sup>36)</sup>

大仰な口ぶりから分かる通り、これは盛大な嫌味である。それでは、誰に対しての皮肉なのか。ここには明記されないが、アンリ 4 世への慇懃な言及で、自ずとイエズス会であることが察せられる。アンリ 4 世は、暗殺によるその死の裏幕が、近世を通じイエズス会はないかと常に疑われていたからである<sup>37)</sup>。

しかし、この作品は少なくとも表面上は、日本についての物語である。タイトルに見られる「レ・ジャマボ」は、「山法師」もしくは「山伏」の日本語から派生している。日本的な言葉をタイトルに用いることで、一見すると、この作品は 16 世紀初頭から 18 世紀まで、ヨーロッパ中で人文教育の一環として隆盛したイエズス会学校演劇の伝統に与しているかのような体裁をまとう。

イエズス会は、16 世紀後半から学校内のラテン語の修辞学やレトリックの教育のカリキュラムに演劇を取り入れてきたが、その演劇の題目にはイエズス会が海外宣教を展開した地域（中南米、中国、そして日本）のテーマが長らく取り入れられてきた<sup>38)</sup>。特に、イエズス会学校では、日本での宣教が 17 世紀半ば以降に実質的に終わった後も、殉教者や偶像崇拜をモチーフとした作品がヨーロッパ各地で演じられ続けていた。この傾向は、ドイツとスイスで顕著で

あったものの、フランスも例外ではなく、1713年にはユトレヒトの和約を記念し、パリのコレージュ・ルイ・ル＝グランで『日本の殉教者テオカリス』が上演されている<sup>39)</sup>。

特に日本のテーマは、イエズス会学校演劇において、最もよく知られた典型的な主題の一大分野を構成するまでになった<sup>40)</sup>。主にラテン語で書かれたこれらの劇では、ヨーロッパ中の良家の子弟たちが、王侯貴族・殉教者・処刑人・暴君などの役を演じた。これらの作品は、ヨーロッパに既存の物語をモデルに、宣教師の報告書で紹介された逸話を非常に自由に編集したもので、高度に修辞化・様式化されていた。遠い国でキリスト教徒や宣教師の神父が信仰のために死んでいくこれらの物語は、二重の意味を持っていた。それは、イエズス会の海外での功績を体現するものであると同時に、カトリックとプロテスタントの対立という、地域によってはより喫緊の時事問題の寓話として理解される。マスメディアがそれほど発達していなかった時代において、この種の演劇は日本についてのイメージをヨーロッパに広く普及させる役割を果たした<sup>41)</sup>。

しかし、17世紀後半から18世紀にかけて、東インド会社経由で、新たな実体験に基づいた紀行文が公表されていくと、啓蒙思想の哲学者たちは、日本の状況把握をイエズス会の実践したような象徴的もしくは文学的な表現に全面的に依存するのではなく、よりバランスある理解を示すようになっていった。1729年、エンゲルベルト・ケンペルの有名な日本旅行記のフランス語訳が出版されると、より正確な（しかし一部においては依然として否定的な）情報をもたらされ、日本への関心はさらに高まった。それを示す代表的な作品が、アントワーン・フランソワ・プレヴォ（Antoine François Prévost, 1697-1763）の『旅行記集成（*Histoire générale des voyages*）』（Paris, 1746-1759）であり、ファルベールもしばしばこのテキストを引用している。プレヴォの出典は、主にケンペルとイエズス会神父ピエール・フランソワ＝グザビエ・ド・シャルルヴォワ（Pierre François Xavier de Charlevoix, 1682-1761）の『日本概史（*Histoire et Description Generale du Japon*）』（1736）である。その抄訳は、『レ・ジャマボ』の出来を厳しく評価した前述のラ・アルプによって書かれ、『旅行記集成摘要（*Abrégé de l'histoire générale des voyages*）』というタイトルで1780年から出版されている<sup>42)</sup>。

これらの本では、ジャマボは（黒）魔術の達人である。ファルベールの戯曲『レ・ジャマボ』でも、山伏であるウランカは多くの生け贄を捧げた儀式を行うよう手配し、その魔法で雷を呼び出すことができると喧伝している。劇の最後に、その全てがまやかしかであることが種明かしされるが、そもそもウランカ自身も自分が公言していることを信じていない様子で表現される。ウランカに代表される「ジャマボ（つまり山伏）」のモチーフは、日本の「宗教」の最も悪い要素、つまり偶像崇拜の思想そのものを体現する存在として選ばれたと考えられる。また、劇的内容的な展開を見ると、ファルベールが悪しき宗教者の典型像としての「ジャマボ」に触発されて物語を進めていたことが分かる。



## 5. 作 品 紹 介

『レ・ジャマボ』は、当時の文学として主流作品ではなく、しかも日本の現実を忠実に再現したものでもない。実際、ファルベールは序文で、この演劇に真実味を過剰に期待しないよう読者にあらかじめ警告している。

日本の様々な僧侶の悪徳を集めて、（演劇中の）ジャマボとボンズのキャラクターに昇華させ、この偶像崇拜の国の僧侶の精神を彼らに投影するようにした。…（中略）…一般に日本の司祭と修道者は、欲深く、欺瞞的で、野心的で、非人間的で、一言で言えば、あらゆる人間の中で最も高慢で邪悪であると言える。（序文、1頁）

ファルベールは、この記述が大袈裟であることを留意しつつ、その描写の瑕疵をイエズス会のせいにしていく。

この作品での「ジャマボ」の設定は、ファルベールによると「聖なる宗教の聖職者」で、18世紀フランスにおけるカトリック聖職者の状況を読み解くための対置的なモデルとして機能している。この設定により、本来縁もゆかりもないはずの「日本」のジャマボとカトリックの聖職者との比較が正当化される。そして、「私の（演劇に登場する）ジャマボに匹敵するような僧侶は、間違いなく滅却に値する」と、この劇の（宗教批判という）目的をかなり明確に主張する。

劇中では、日本（Japon）を中心に、その隣国の中国（Chine）や朝鮮（Corée）も登場する架空の東アジア世界において、ジャマボたち自身がいかに危険であるかだけでなく、ヨーロッパにおける彼らの同胞であるイエズス会の危険性も、同時に何らかの方法で説明しようと試みている。そのためにファルベールは、多かれ少なかれ微妙な含意をほのめかしながら進めていく。その真意は、読者が解き明かすまでもなく本書の第2部である「備考」で筆者自身が説明している。第2部は基本的に、戯曲の特定箇所についての作者自らの解説で構成されており、時には脱線しながらも、フランスの宗教史、特にアンリ4世以降のプロテスタントの命運やイエズス会の史的展開との関連性を、ファルベールなりに歴史的に分析している。

演劇のプロット自体は支離滅裂と言っても過言ではなく、はっきり言って、その筋書きを追うのに読者は苦勞する（作者のファルベールは構成の天才ではない）。基本的には、日本の「皇帝」であるタイコを操って権力を握ろうとするジャマボのリーダー、ウランカ（Uranka）が権力を掌握しようとする策略の顛末が物語の流れを作っている。ウランカはその目的を達成するために、他の登場人物それぞれの弱点や主義主張を逆手に取って、すべてのライバル、さらには皇帝の二人の息子であるオキマとタンマという正統な後継者たちまで排除しようとする（ちなみに、財産をめぐる相続争いは、おそらく宗教的狂信と並び、この本の主要テーマの一つである）。そのた

めに、まず皇帝タイコに息子オキマの狂信を恐れさせ、哲学者の友人であり、心の広い若いタンマを代わりに任命するように仕向ける。さらに、オキマの許嫁である朝鮮の王女アジェニーを、次期後継者となったタンマに譲らせるよう皇帝タイコに迫り、王女をめぐる二人の兄弟の争いを誘発する。このため、オキマと朝鮮人の反乱が起こり、それに乘じて宮中のジャマボ達の画策が隠蔽される。兄弟は衝突し、そのためにオキマは瀕死の重傷を負い、アジェニー姫は絶望する。

このように、ウランカとジャマボの一味は、信心深さを利用して野心を満たす偽善者に過ぎない者たちとして描かれる。神々から授かったとする奇術、特に雷は、実はウランカがヨーロッパの難破船から得た秘伝の火薬に過ぎない。彼は、宮殿の周りに怒れる民衆を集めた後、宮殿の基礎に火薬を仕込んで爆発させ、敵を一掃しようと計画する。また、魔術によって火山の口を開かせ火の海に敵を飲み込むように命令してみるが、何も起こらない。そこに何人かの警官がやってきて、地下に潜入していたジャマボの一味を逮捕したと言う。

ごまかしがばれ、ウランカは牢屋に入れられてしまう。アジェニーは自殺を図ろうとするが、皇帝に阻止される。劇中、一貫して語り手もしくは傍観者のような存在であった学者イルマジスは、最後のシーンで結果を説明するために突然物語に登場してくる。彼は皇帝に、すべてが沈静化したこと、真実が明らかになった途端、ジャマボ達は群衆によって虐殺されたことを告げる。そして皇帝タイコが、迷信のために息子のオキマが犠牲になったことを嘆き、偶像崇拜の神官のいない別の帝国の誕生を希求した所で幕は閉じる。

## 6. 資料に見るジャマボ：偶像崇拜者もしくは悪魔として

劇の中心テーマはジャマボの無数の悪徳である。もともと日本で活躍した宣教師がヨーロッパ各地で流布させた報告書を通じて伝えた山伏のイメージには、偶像崇拜と宗教的狂信が繰り返し登場する。それはもちろんファルベールのテキスト（すなわち『レ・ジャマボ』第2部部分）で批判の対象となるイエズス会の悪徳と重なっている。しかし、これは当初からそうであったわけではない。山伏という言葉は、隠者としての修験者とその慣習のみを指すはずで、もともと批判的に記述されていたものだった。一方で、天台宗の高僧である比叡山延暦寺の僧兵は、当時山法師と呼ばれており、初期のイエズス会宣教師たちは、この2つの言葉を区別しようとしていた。

18世紀のヨーロッパでは、主にケンペルの著作によって、「ジャマボ」は特別な意味を持つようになったが、演劇の作者ファルベールおよびその批評家たちが最も親しんだと思われるのは、ケンペルを引用して書かれた『百科全書』の記事の方であろう。ここには、山伏・山法師をそれぞれ指すと考えられる二つの項目が見られる。

山伏に擬せられたイエズス会士（小俣ラポー）

JAMMABOS, s. m. (Hist. mod.) これは日本の僧侶で、すべての俗物を捨て、非常に厳格に生活することを公言し、時間をかけて山を旅し、冬には冷たい水で水浴びをする。…(中略)…秘密と称して、命あるものを断ち、一日七回冷水で洗い、踵に尻を乗せて座り、その姿勢で手を頭の上で打ち、一日780回起きるなど、非常に厳しい試練をクリアしなければ入門を認めない。ケンペルの『日本旅行記』(Kemper, *Voyage du Japon*)を参照<sup>43)</sup>。

XAMABUGIS, s. m. (Hist. mod. superstition.)

シャマブギとは、日本の僧侶やボンズ (bonzes) の一種で、仏教やシアカ (Siaca) の宗教を信奉している。彼らは、偽りの神の神殿を訪れる敬虔な巡礼者たちの案内役である。(信奉者に) 裸で旅をさせ、厳しい禁欲を強要し、隊列についていけない不幸な者、荒地をどうしても越えなくてはいけないのに助けを求めて死んでいく者に哀れみをかけず見捨てていく。そしてこの野蛮な僧侶たちは、巡礼者たちをさらに非人間的な僧侶であるゲンギ (genguis) の指導下に置き、極端な狂信という言葉では到底正当化できないような厳しい態度で彼らを扱う<sup>44)</sup>。

このように『百科全書』においては、「山法師」が「ジャマボ (Jammabos)」に反映されている一方で、「山伏」は「シャマブギ (Xamabugis)」の項目に反映されているように見える。両者の項目に見られる共通点は、彼らの宗教的な狂信である。ジャマボの単語は「J」で始まっていることから、『百科全書』内の記事で明示されているように、ドイツ語系の典拠 (ケンペル) に由来することが分かり、一方でシャマブギはイエズス会神父シャルルヴォワの仕事に反映されたポルトガル系の宣教師由来の文献に端を発することが分かる。ファルベールの演劇では、「ジャマボ」が「シアカ (Siaka, スベルが共通)」を信仰していることから、単に「ジャマボ (Jammabos)」の項目ではなく「シャマブギ (Xamabugis)」の項目もあわせて参考にしたと考えられる。

もしこれらが彼の主な典拠資料であるなら、ファルベールがイエズス会の著作の中にこそ、ジャマボを非常に侮蔑的に表現する正当性を見出したのはあながち間違っていない。彼が劇中でジャマボたちに与えている否定的な特性の一部は、むしろイエズス会そのものの性格に関連づけられ、狂信的・偶像崇拜的・迷信的な聖職者を描いている。この3つの特性は、彼が劇中で提唱する哲学的モデルとして最たる儒教の特徴とは対極にある。ここに表現された山伏 vs. 儒者 (すなわち聖職者 vs. 哲学者) の二項対立は、戯曲に明快な道徳的枠組みを与えている。この構造のためにファルベールは、かつてイエズス会の神父たち自身が発展させ、批判の対象とした日本の宗教についての概念に依ったのである。

イエズス会の神父たちの日本の山伏らに対する反感は、山中での禁欲主義的修行、呪術的な

力、自然物と結びついた神格への崇拜を特徴とする彼らのいわゆる神仏習合的な信仰にも起因している<sup>45)</sup>。イエズス会の印刷物では、これらの神々（例えば五鬼）は、日本で最も悪魔的で「偶像崇拜的」な存在として言及されている。このような記述は非常に多く、例えばホセ・デ・アコスタの『新大陸自然文化史』にも見られる<sup>46)</sup>。

この「偶像」との闘いは、日本に限らず世界中のイエズス会の宣教での重要な使命であった。したがって、イエズス会学校演劇は、定期的に偶像破壊とキリスト教への信者の改宗を演出している<sup>47)</sup>。日本のいわゆる「偽りの神」との戦いは、ローマにあるイエズス会の母教会であるジェズ教会にある偶像崇拜と異端を表す一対の像にさえ描かれている<sup>48)</sup>。しかし、偶像は単なるイメージやアイコンではなく、非難されるべきとされる一連の慣行や観念、より高度な理念を表現した実態として指し示されているのである<sup>49)</sup>。

## 7. 偶像崇拜者 vs. 哲学者

演劇の敵役には、それに対抗する役回りもあった方が面白い。少なくとも、『レ・ジャマボ』の作者ファルベールはそう考えた。ジャマボと呼ばれる野蛮な偶像崇拜者がこの演劇での悪役なら、それに対する完璧なカウンターモデルが儒学を修めた哲人宰相のイルマジスである。儒者のイルマジスは、ウランカとその子分の最も危険な敵としてだけでなく、作者ファルベール自身と同じ知的系統に属するものとして、幾度となく登場するのである。したがって劇の冒頭で、ジャマボと同盟を結んだふりをする僧侶のムラミ (Murami) が、ウランカと排除すべき敵について議論するとき、彼らが最も恐れる共通の仮想敵はイルマジスとなる。彼を通じてタイコが中国から持ち込んだ教義で、自分たちが害されるのではないかと考えるのだ (p.8)。彼らによれば、儒学はすべての宗教を否定し、人間には理性を働かせ、高潔に生き司祭に逆らうよう命じている。その後、タンマを後継者に選んだことを発表しようとする皇帝は、迷信に対する長い暴言を吐き、その中で中国の賢人すなわち孔子に感謝し、それを模範とする者こそ後継者に相応しいと宣言する (p.52-54)。

このように儒教を非常に好意的に表現しているのは、イルマジスの物語の語り手というキャラクターを通じて、ファルベールが、自身の声を劇中に直接投影させるためである。実際、物語で展開される議論のほとんども、哲学者、とりわけヴォルテールに遡る知的系譜に与している。ヴォルテール自身、ケンペルの読者であり<sup>50)</sup>、孔子を哲学者として高く評価し、そのモデルを通じヨーロッパの専制主義を非難した<sup>51)</sup>。デイドロも、『百科全書』内の項目「日本、哲学者 (Japonois, philosophes des)」の中で、日本の儒教について言及している<sup>52)</sup>。それによれば、儒教の信奉者は合理的で誠実であるが、少数派でもある<sup>53)</sup>。実際、デイドロは仏教の普及を、儒教の徳に対する偶像崇拜と安易な約束（特に不老不死）の勝利の一形態と表現している<sup>54)</sup>。

ファルベールの戯曲における設定の背景が、ここに見出せるだろう。

この劇で表現された儒教を学者、それも哲学者の宗教とする見方は、ヴォルテールやデイドロと完全に一致するものである。このことは、「日本のジャマボは、実はヨーロッパのイエズス会である」という劇中の中心的な主張を見れば、いっそう明らかであろう。しかも、ファルベール自身が登場人物の口を借りて指摘しているように、彼らジャマボは無能なバージュンのイエズス会士である。ファルベールは、ジャマボが裏切り者となった僧侶ムラムの侵入を許したところで（ただし、ムラムは発見される）、イエズス会ならこんな失態はしなかったはずだと説明する。彼は最後に、（ヨーロッパの）イエズス会の神父たちは、（彼の意見では）日本のジャマボたちよりも陰謀や政治に長けているとすら述べている<sup>55)</sup>。

反イエズス会感情は、実際、物語全体を紡ぐ横糸である。このファルベールは、デイドロ自身がこの教団に対して抱くようになった（より複雑な）反感に影響を受けている<sup>56)</sup>。この演劇でファルベールは、日本の例を用いてヨーロッパのカトリック教会を批判するデイドロに倣っている。例えば、ファルベールは、ジャマボに狂信的な宗教者像を託していたが、『百科全書』の「狂信 (Fanatisme)」の項では、日本人の二種類の狂信が言及される。まず、「狂信のせいで、戦争が正当化され宗教行為とみなされる。日本人の政治には軍人しかいない。聖遺物として血まみれの剣と偃月刀しかない<sup>57)</sup>。」また、「聡明で精神性の高い日本人でさえ、彼らの理不尽だらけの宗教に頭を悩まされたせいで、救済の神アミダ (Amida) に身を捧げて溺れる<sup>58)</sup>。」これらの箇所では、日本人に一定の評価を示す一方で、暴力的かつ理不尽であるというイメージが改めて描かれる。

しかし、『百科全書』派の思想家にとって、宗教的狂信は、カトリック教会、特にイエズス会の特徴でもある。デイドロは「日本、哲学者」の項目で、神父たちの無謀さが日本での宣教を失敗させた原因であると説明している<sup>59)</sup>。このように、日本というプリズムを使って教会の欠点を明らかにする方法は、より遠回しにはあるが、日本の様々な仏教宗派に関するデイドロの記事の中にも見られる<sup>60)</sup>。このような先人の指向を鑑みると、ファルベールはおそらく、彼が倣った偉大な先人たちほどには才能に恵まれなかったエピゴーネンと言えるかもしれない。ファルベールの議論に独創性が認められるとするならば、特定の地方社会で噴出した具体的なイエズス会のスキャンダルを、演劇という表現方法で敢えて表現しようとしたことだろう。

## 8. 当時のフランスの時事問題との関連性

劇中でのジャマボは、非常に強欲な人物として描かれており、自ら「あらゆるものは売買できる」と台詞で明言している。彼らの悪徳ぶりは、その企みに必要な資金を得るために必要なことだと説明される (p.38)。かなり生々しい悪意を秘めたこの主張は、劇中でも繰り返し主

張されるものでもあり、ウランカが遺産を獲得しようとするための格好の口実となっている。

このようなジャマボたちの悪巧みは、『レ・ジャマボ』の161頁から10頁近くにわたって掲載されている。物語のこの部分は、筆者自らによる作品の解説17番目の記述と関連づけられる。ここで語られるのは、ファルベールの出身地であるフランシュ・コンテ地方の都市ブザンソンの素封家ダンシェ (D'Ancier) 家の遺産相続にめぐる顛末である。この事件は『レ・ジャマボ』の刊行より1世紀以上も前に起こった出来事だが、同地方の出身であるファルベールを魅了した。この複雑な事件は、ファルベールの筆致によって、イエズス会にとって全く好ましくない形で描かれている。

この地方の名士アントワヌ・フランソワ・ゴートイオ・ダンシェ伯爵 (Anthoine François Gauthiot D'Ancier) は、1629年にローマで亡くなる前に、財産の大部分をイエズス会に遺贈する約束をしていたが、これに対し直系の子孫が異議申し立てを起し、長い間その財産の行く方は法廷闘争の対象となっていた。結局、裁判所がイエズス会に有利な判決を下したため、同会は1649年に晴れて一族の財産を手に入れることとなった。ただし、ファルベールによると、有利な判決を得るために、イエズス会は一部書類の改ざんを行なったという。

というのもファルベールによると、イエズス会は長い間ダンシェ伯爵家の財産を熱望していたがために、(都合良い遺言書を作成させるために) 臨終に及んで伯爵をローマにわざわざ招いて連れて来させた。しかし、イエズス会に有利な遺言書を作成する前に、伯爵はローマで亡くなってしまった。ここでファルベールは、イエズス会による非常に面白いごまかしを説明する。フランシュ・コンテのとあるイエズス会神父は、ドニ・ウブラールという農夫が伯爵によく似ているのに気づいた。そこで、イエズス会は彼をローマに連れて行き、遺言が作成されている間、伯爵になりすませたのだと言う<sup>61)</sup>。おまけにファルベールは、ウブラールが後日反省していた、と言うエピソードまでご丁寧に付け加えている<sup>62)</sup>。

『レ・ジャマボ』の物語そのものよりも喜劇としての潜在力があるように見えるこのゴシップは、明らかに『レ・ジャマボ』のプロットに呼応している。裏技、策略、悪徳、やんごとなき一族の遺産の強奪などは、劇中の悪役ウランカがいかにも取りそうな行動であり、実際に作品内で展開される。揶揄と茶番の中間のようなトーンは、同様に劇中の発言にも見られ、悪役のジャマボは物語のヒーローとヒロインにとっての脅威であるにもかかわらず、しばしば嘲笑される三枚目の立ち回りをするようになる。

## 9. イエズス会学校演劇の風刺

しかし、『レ・ジャマボ』は喜劇ではない。それどころか、副題『アンリ4世に捧げられた悲劇』から明らかのように、作者はあくまでも悲劇を意図していた。悲劇の体裁を取ることで、

効果的にイエズス会学校演劇の風刺すなわちパロディとなることを狙っているのだ。実際『レ・ジャマボ』は、社会問題を扱った前作『紳士的な犯罪者』の二番煎じである感は否めないが、日本におけるイエズス会の伝道活動と、行き過ぎたカトリックの批判だけではなく、イエズス会の学校演劇の伝統をも批判している点では革新的であった。

このテーマについて最も示唆に富むのは、劇の前半3分の1、ジャマボ陰謀団とその盟友である僧侶ムラムが計画を話し合う重要な場面である。例えば、ムラムが中国の皇帝の暗殺について持ちかけると、ウランカが次のように提案する。まず、現地にジャマボを派遣させ、彼らの教えと規律がまずもたらされる。そしてそれに加えてウランカは、自分たちジャマボが、高貴な人々に奉仕するために駆使していると言う方法まで説明し始めるのだ。曰く、まず宮殿に入るためには、謙虚で素朴な姿を見せなければならない。そしてジャマボは、宗教者の立場を利用して寺院を増やし、特に権力者の息子や学識経験者の間で弟子を獲得する。特別な才能のない下品な人々や庶民は、その存在が直接的に彼らの目的に役立つわけではないのだから、殉教者になるだけで十分だろう、とまで付け加える。下々の者は、犠牲となるくらいしか出来ず、殉教者としての栄光が、ジャマボの秩序全体に反映されることになる、と言う驚くべき論理である<sup>63</sup>。

ここでも、これらの批判の真の標的が誰であるかは、疑いのないところである。もともとイエズス会は、日本における宣教活動の当初、そこまで殉教の推進に熱心ではなかったばかりか、豊臣秀吉が政権をとった日本の長崎で、1597年に日本のキリスト教徒と宣教師総勢26名が磔にされた事件を目の当たりにしても、彼らを直ちには積極的に公的な顕彰の対象にしようとはしなかった。しかし、イエズス会の創立者イグナチウス・ロヨラや、アジア宣教の先駆者たるフランシスコ・ザビエルの列福の達成および列聖の目的がたち、東アジア宣教の主戦場が日本から中国大陆に移行するのと並行して、積極的に殉教者の聖性を広め公認させようと努力するようになっていった。その結果、殉教者の画像や殉教伝が、イエズス会により多く作成され演劇の題材にも取り上げられるようになった<sup>64</sup>。そのため現在の歴史研究では、イエズス会は近世において「殉教の文化」を牽引した宗教団体であると捉えられるようにすらなっている。実際イエズス会が、殉教の言説をヨーロッパにおける日本宣教のレトリックとしたことは、別稿で述べた通りである<sup>65</sup>。そのため、殉教報告の誠実さや真正さを疑い、あまりにも良く出来すぎた知らせの正当性を問うことが、逆にイエズス会への皮肉や攻撃として効果を発揮することとなった。

その最たる例であり嚆矢と言っても良いのが、アグリッパ・ドービニエ（Agrippa d'Aubigné, 1552-1630）による『サンシー殿のカトリック告白（*Confession catholique du sieur de Sancy*）』（1598）の中での記述である：「イエズス会士たちの言葉によると、日本ではイエズス会士が磔刑にされて大いなる奇蹟を起こし、それらの奇蹟は日本以外では起こりえないという。（中略）

それが本当かどうか確かめるためにフランスのユグノーをみな日本に行かせねばなるまい。<sup>66)</sup>」

この台詞は、『サンシー殿』の架空の告白者、元プロテスタントからカトリックに転向した皮肉屋で日和見主義のサンシー自身の口から出ている。従って、一見するとカトリック護教的な本に見えながら、実は正反対の内容・主張をもつ皮肉的な本であり、本自体がカトリック信仰を茶化している。

実際、イエズス会学校演劇で上演された数多くの劇の主人公は、殉教者であった。そのため、ドイツ語圏に比べてこの主のテーマがあまり盛んではなかったとされるフランス語圏でさえ、日本人殉教者の劇の存在が認められる<sup>67)</sup>。これらの劇は、当初は暴力を神聖視するような霊的なカタルシスに焦点を当てていたが、時とともに主に寓意的な表現に移行するようになったことに留意する必要がある。こうした寓意的な演劇作品では、信仰を貫徹する殉教のような宗教上の美德や概念そのものが擬人化され、直接的な暴力表現や残酷なシーンが忌避されるようになった<sup>68)</sup>。つまり、イエズス会の高尚な理念を表現し普及させていたイエズス会演劇においては、殉教はそこで示される崇高な精神の代表の一つであった。

しかしファルベールは、殉教をジャマボ（すなわちイエズス会）の意図的な戦略の結果であるとジャマボ自身の口から表現させることで、殉教が徳の問題では全くないことを示そうとするのであった。殉教はもはや高尚な美德へと昇華されるものではなく、嘲笑されているのだ。明らかに、従来の教会や宗教的団体のあり方に疑問を呈している啓蒙思想家の著作の中では、自殺や殉教に対する批判的まなざしが、非常に顕著となっていた<sup>69)</sup>。

## 10. ドイツにおける殉教の否定と劇の受容

イエズス会学校演劇において、殉教という題材がフランス語圏と比較して長命であったドイツでは、ファルベールが演劇に込めた皮肉はより理解されたと考えられる。実際、『レ・ジャマボ』に関しては、普及した全ての本が、前述のヌーシャテルの名士・ダルネ名義で購入されたわけではなく、同じヌーシャテル市内の書籍店から複数の注文が入っていたほか、ジュネーブ、シャンベリー、バーゼル、サン・ペテルスブルグ、ストックホルム、チューリン、そしてハンブルグからも注文があり、合計すると1250冊もの本が合わせて刊行されていたことが分かる<sup>70)</sup>。中でもハンブルグからは、ダルネを抜かせば最多の38冊の注文がなされている。

同時代のハンブルグでは、ちょうどレッシングの有名な『ハンブルク演劇論 (*Hamburgische Dramaturgie*)』が執筆され、殉教劇そのものの妥当性が問われ始めていた時期に当たる。このとき殉教劇は、悲劇というジャンルに属するかどうかさえ疑問視され始めていた。彼によると、来世での幸福を願って現世での死を選ぶことは、決して特筆すべきことではない。主人公が殉教者である悲劇は、観客を泣かせることだけを追求するあまり、単純化された文字列になって



いるとすら批判している<sup>71)</sup>。これは、殉教演劇のコンセプト、言説、価値観全体に対する挑戦的な問いかけでもあった。

また、イエズス会演劇は、その内容だけでなく、形式も批判の対象となっていた。古代の劇のようなプロローグ・エピローグ・コーラスからなる構造、そして中世の聖史劇や神秘劇などにルーツを持つ間奏曲（interludium / intermedium）の演劇的手段が古い学校劇の伝統から引き継がれていた。イエズス会の学校劇は一貫して、演劇の幕間の中間的な要素（時にはバレエなども）を、舞台における表現方法の一環として発展させてきた。しかしこのような装飾的な形式は、しばしば啓蒙主義の思想家たちに滑稽な印象を与え、時代遅れとみなされるようになった。フリードリッヒ・ニコライは、18世紀初頭のウィーンのイエズス会演劇について、こう述べている<sup>72)</sup>。

このような無意味な方法、前幕、副幕、後幕を持つ演劇、アブラハムとイサクがペルセウスとアンドロメダと（舞台上で）会するようなことは、今ではありえるようなこととして想像することがほとんどできない<sup>73)</sup>。

この記事は、イエズス会演劇の性質や特徴に知悉した人物の目から、ドイツにおける彼らの演劇の本質を正面から攻撃したものと言える。

直接的ではないが、レッシングと日本、そしてファルベールの『レ・ジャマボ』の間には、実はもう一つのつながりがある。ハンブルクで1782・88年に『レ・ジャマボ』のドイツ語翻訳が出版されたのである<sup>74)</sup>。これは管見の限りでは、『レ・ジャマボ』の唯一の外国語翻訳である。翻訳者は、この街の政界に影響を持った人物、アルブレヒト・ヴィッテンベルク（1728-1807）である。本文はデンマーク皇太子フレデリク6世（Frederick VI, 1768-1839）に捧げられており、ヴィッテンベルクは皇太子から恩恵を受けることを望んでいたようである<sup>75)</sup>。ドイツ語翻訳の序文（頁番号なし）では、ハンブルク周辺の地域だけでなく、「ドイツ全土に思想と言論の自由を保証してくれた」神聖ローマ皇帝ヨーゼフ2世（1741-1790）への謝辞が記されるが、これは『レ・ジャマボ』翻訳の動機もしくは背景として理解される。もとのファルベールの文章は明らかにイエズス会を示唆しているが、その名は伏せて付け加えている。ヴィッテンベルクは、近世のカトリック教会の権勢を体現していたイエズス会の解散を賛えるばかりでなく、その退場を他の有害な組織の消滅のしるしとみなし、彼の言うところの「大宗教改革」の完成を望んですらいる。そのため、自分の『レ・ジャマボ』翻訳がこの究極の目標達成へ寄与することを望んでいるとまで述べている。

とはいえドイツ語訳は、フランス語原文の第2部を占める作者ファルベール自らによる解説部分が欠落しているため、完全な翻訳とは言えない。なお、ウィッテンベルクは、この劇が好

評であれば、未訳部分のドイツ語訳を検討すると説明している。最後に、批判から身を守るかのように、原文のすべてに同意するわけではないが、原文に忠実でありたいと強く願っていることを明記している。

ドイツ語版の劇は、ヴィッテンベルクが期待したほどの成功には至らなかったようだが、『レ・ジャマボ』のテーマを一般に普及させるのに役立った。たとえば、ハンブルクの政界で、アルブレヒト・ヴィッテンベルクとライバル関係にあったマティアス・クラウディウス(1740-1815)は、『アスムス全集；ワンズベッカー・ボーテ誌から／のための著作集 (ASMUS omnia sua SECUM portans, oder sammtliche Werk des Wandsbecker Bothen)』(1775-1812)で、これについて何度か言及している<sup>76)</sup>。ファルベールの戯曲の影響も考えられるが、1778年にレッシングが同じクラウディウスにあてた手紙にこの言葉があることからわかるように、ドイツではこの作品がすでに知られていたことを念頭において置く必要がある<sup>77)</sup>。

全盛期のイエズス会は、修道会としてだけでなく教育機関を運営することで、演劇というジャンルへの貢献を通じ、ヨーロッパ大陸における日本のイメージも再定義することになった。この伝統はドイツにおいては、18世紀においてもまだ積極的に継承されていた。しかしドイツでも『レ・ジャマボ』は、本当の意味で大きな社会的インパクトを与えるには遅すぎたようだ。レッシングの判断では殉教者という模範が知的エリートにとって、もはや終わりを告げつつあったこの時代、イエズス会の殉教劇の黄金時代ほどには、関心が高まるわけがなかったのだ。

### 結語にかえて

『レ・ジャマボ』は、作者の希望にもかかわらず、一度も上演されることのなかったマイナーな作品である。しかし、この作品は、革命後も舞台から姿を消していたにもかかわらず、作者の努力により、ターゲットを絞った配給によって都市部で読者を獲得し、結果としてドイツ語にも翻訳された。このような反イエズス会の劇が作られたことは、イエズス会の表舞台からの退場後もその演劇文化が影響を及ぼし、その枠組みやテーマがあらゆる演劇作品に浸透していたこと、ケンペル以前は長い間宣教師の専売特許となっていた日本のイメージの形成に、引き続き影響を与え続けていたことを証明している。実際、ファルベールは、処女作品ではヴォルテールに触発されたかもしれないが、『レ・ジャマボ』では、忠実にイエズス会演劇の伝統を踏襲しているように見える。皇帝や王子のようなやんごとなき人々、偶像崇拜を奉じる異教の僧、殉教者といった人物設定は、イエズス会の舞台を手本にし、権謀術数の宮廷の駆け引きを繰り広げる人物関係も、イエズス会演劇に典型的な特徴となっている。

ファルベールが『紳士的な犯罪者』内で物語の主人公を復権させたようには、『レ・ジャマ

ボ』の方は批評家からは必ずしも肯定的に評価されなかったが、少なくとも世間の議論に影響を与えようと定期的に努力していたようである。彼の作品の一部は実際、革命時に脚光をわずかながらも浴びることができた。例えば、『紳士的な犯罪者』は1790年以降パリで上演され、そこそこの成功を収めた<sup>78)</sup>。彼の作品がイエズス会の舞台の本質に関する本格的な議論につながらなかったとしても、フランスでエリート教育と非常に結びつきの深かった演劇に対する彼の攻撃は、革命期のパリで彼の評判を多少は高めることに貢献しただろう。こうしてファルベールは、幸運にも時流のおかげで正式なキャリアへの道筋を再び求めることができた。

また、アンシャン・レジーム期にはまだ少数派であり、ほとんど目立たない存在であった思想の一形態が、『レ・ジャマボ』には興味深い形で残されていると言える。確かに、演劇史・文学史への貢献という観点から言えば、その影響力は微々たるものである。しかし、その制作背景や論点を分析することを通じ、本稿では政治的メッセージを伝えるためにこの種の演劇が利用された方法を示し、『レ・ジャマボ』が近世ヨーロッパにおける日本のテーマの変幻自在性を示す優れた例であることを示した。かつて中川久定は、『百科全書』内の日本への言及を分析し、18世紀フランスの啓蒙思想家の言説では、欧州内部の宗教や政治体制を批判するために、日本が鑑として用いられるようになったことを指摘した<sup>79)</sup>。この類の鑑として供される啓蒙思想家の「日本」像と、17世紀を通じて紡がれてきたジャン・クラッセやシャルルボワといったイエズス会士たちの著作に残る英雄と殉教者の国である教会の日本像は、『レ・ジャマボ』の中に拮抗しながら共存している<sup>80)</sup>。『レ・ジャマボ』はその点で、西ヨーロッパの日本像の過渡期を体現した作品なのである。

## 注

- 1) これは、以下に掲載される分析に加えて、2022年8月に実施したヌーシャテル公立大学図書館 (Bibliothèque publique et universitaire Neuchâtel, 以下 BPUN) における調査の結果を加え、2021年11月以降に実施した京都大学人文科学研究所における中川文庫調査により得た見解を加え改稿したものである。Hitomi Omata Rappo, « *Les Jammabos ou les moines japonais (1779): Une parodie du théâtre jésuite* », dans Nicolas Brucker (dir.), *Le théâtre de collège dans l'espace public au XVIII<sup>e</sup> siècle: un dialogue entre scène et société*, Bruxelles, Éditions de l'Université de Bruxelles, 2023. この場を借りて、中川文庫について直接ご教示くださった京都大学名誉教授松田清先生、人文科学研究所図書掛山崎千恵掛長、並びに調査を許可して下さった BPUN のスタッフ各位、京都大学白眉センターに深くお礼を申し上げます。
- 2) « *Les Jammabos* » の発音に関しては、以下の大百科事典の発音記号 (ja-ma-bo) を参照に「レ・ジャマボ」とした。Pierre Larousse, *Grand Dictionnaire Universel (...), vol. 16, supplément*, Paris, Administration du grand dictionnaire universel, 1878, p. 998.
- 3) Charles Georges Fenouillot de Falbaire de Quingey, *Les Jammabos ou Les moines japonais: tragédie dédiée aux uranes d'Henri IV et suivie de remarques historiques*, Neuchâtel, Société

- typographique de Neuchâtel, 1779, BPUN, Fonds des imprimés anciens, TH 252. 本書の書誌情報は以下による。Michel Schlup (dir.), *L'édition neuchâteloise au siècle des Lumières: la Société typographique de Neuchâtel, 1769-1789 — recueil d'études*, Neuchâtel, Bibliothèque publique et universitaire, 2002, p. 261. これによると, VIII, 232 p.; 8" (21 cm).
- 4) BPUN, Fonds STN, MS. 1034 (Brouillard B), fol. 316.
  - 5) ロバート・ダーントン著, 二宮宏之・関根素子訳『革命前夜の地下出版』(岩波書店, 1994年) 160頁。
  - 6) Mark Curran, *The French Book Trade in Enlightenment Europe I. Selling Enlightenment*, London; New York, Bloomsbury Academic, 2018, p. 110.
  - 7) 寿岳文章「世界の出版史」(『世界大百科全書(改訂新版第6刷)』2014年, Japan Knowledge 収録)。ただし、『レ・ジャマボ』は、発行部数のわりには現在多くの図書館に残されているわけではない。
  - 8) 前注4に同じ。
  - 9) Michel Schlup (dir.), *L'édition neuchâteloise au siècle des Lumières*, p. 164.
  - 10) Mark Curran, *The French book trade in Enlightenment Europe I. Selling Enlightenment*, p. 110.
  - 11) 前注4に同じ。
  - 12) ロバート・ダーントン前掲書『革命前夜の地下出版』169頁。このルートの地図が、同書169頁に見られる。
  - 13) Jean-François de La Harpe, *Œuvres complètes de Jean-François de la Harpe, Volume 11, Correspondances littéraires*, Paris, Verdière, 1820, p. 131-132.
  - 14) この過程については, Dale K. van Kley, *Reform Catholicism and the International Suppression of the Jesuits in Enlightenment Europe*, New Haven & London, Yale Univ. Press, 2018, p. 109-149; Catherine Maire, « Des comptes-rendus des constitutions jésuites à la Constitution civile du clergé », dans Pierre Antoine Fabre et Catherine Maire (dir.), *Les Antijésuites. Discours, figures et lieux de l'antijésuitisme à l'époque moderne*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2010, p. 401-427.
  - 15) Louis Petit de Bachaumont et al., *Mémoires secrets pour servir à l'histoire de la République des Lettres en France, depuis MDCCLXII jusqu'à nos jours ou Journal d'un observateur, tome quatorzième*, Londres, John Adamson, 1784, p. 314 (中川文庫 88. Livres in 12°: 99.), 引用元: Bruno Dubois, « Le « Japon » dans les écrits des libres penseurs du XVIII<sup>e</sup> siècle français », *The Review of Liberal Arts* (『小樽商科大学人文研究』), 130, 2015, p. 201.
  - 16) Auguste Béranger, *Voltaire, poète tragique*, Lausanne, Imprimerie Genton, Voruz & Dutoit, 1860, p. 28.
  - 17) Friedrich Melchior von Grimm, *Correspondance littéraire, philosophique et critique de Grimm et de Diderot, depuis 1753 jusqu'en 1790. Tome dixième 1778-1781*, Paris, Furne, 1830, p. 246-247 (人文科学研究所 955.6[G/86]).
  - 18) この件に関しては, 以下を参照のこと。Graham Gargett, *Voltaire and Protestantism, Studies on Voltaire and the Eighteenth Century*, Oxford, Voltaire Foundation at the Taylor Institution, 1980, p. 352.
  - 19) Maurice Tourneux (dir.), *Correspondance littéraire, philosophique et critique par Grimm, Diderot, Raynal, Meister, etc., revue sur les textes originaux, comprenant outre ce qui a été publié à*

*diverses époques les fragments supprimés en 1813 par la censure, les parties inédites conservées à la Bibliothèque ducale de Gotha et à l’Arsenal à Paris*, Paris, Garnier frères, 1879, p. 190 (中川文庫 4510).

- 20) この劇中の退屈さについては、例えば次のような記録がある。Charles Palissot de Montenois, *Euvres complètes de M. Palissot, tome troisième*, Londres (Paris), Jean-François Bastien, 1779, p. 263-264 (中川文庫 Livres in 12°: 35. (原典 #4699))。
- 21) パリのデイドロからギャリックへ宛てた 1767 年 1 月 20 日付の書簡。これは、ファルベール自身が、同じく 1767 年のヒュームへの手紙の中で述べていることでもある。この手紙については、以下を参照：Ronald Grimsley, “A French Correspondent of David Hume: Fenouillot de Falbaire”, *The Modern Language Review*, 56, 4, 1961, p. 561-563.
- 22) この 3 点は、①「感性の欠如 (insensibilité)」(8: 787-788), ②「サランの塩田 (Salines de Salins)」(14: 558-564), ③「モンモローの塩田 (Salines de Montmorot)」(14: 564-568)。これらは、『百科全書』内では無記名の項目であるが、以下のファルベールの全集においてファルベールの作品であるとされている。*Les œuvres de Falbaire de Quingey*, tome I, Paris, 1787, p. 289, 352. 『百科全書』は以下を参照：Denis Diderot et Jean le Rond d’Alembert (dir.), *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, etc.*, Samuel Faulche, Neuchâtel, 1765. 以下で閲覧可能：University of Chicago: ARTFL Encyclopédie Project (Spring 2021 Edition), Robert Morrissey and Glenn Roe (eds.), <https://encyclopedie.uchicago.edu>. (2022 年 11 月 30 日閲覧)。
- 23) ロバート・ダーントン前掲書『革命前夜の地下出版』第 2 章参照。
- 24) 例えば、このラ=センヌは、『日本についての哲学的考察』を、『日本風俗考』と改題し新著として公刊するといったような提案もしている。Ibid., 109 頁。
- 25) 実際に、BPUN, Fonds STN に見られる STN 出版社からスイス外へ宛てられた国際郵便の書簡の控え（写し）は、多くの場合、未払いの請求書の支払い督促状である。
- 26) ロバート・ダーントン前掲書『革命前夜の地下出版』148 頁。
- 27) 『ジャマボ』などの作品に当局が関心を示さない可能性について、Mark Curran, *Op. cit.*, p. 124.
- 28) 実際、「ヌーシャテル印刷協会」の固有名詞が最初に登場した箇所では、「訳語（を調べる）」という中川久定の注意書きが見られる。ロバート・ダーントン前掲書『革命前夜の地下出版』VII 頁。ロバート・ダーントン著、海保真夫・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』（岩波書店、1986 年）。
- 29) ロバート・ダーントン前掲書『革命前夜の地下出版』, 22-27 頁。
- 30) Ibid., 187 頁。
- 31) Ibid., 175-192 頁。ロバート・ダーントン著、近藤朱蔵訳『禁じられたベストセラー』（新曜社、2005 年）46-121 頁。
- 32) 王寺賢太「まえがき」（『京都大学人文科学研究所共同研究資料叢刊第 9 号 京都大学人文科学研究所所蔵 中川文庫貴重書目録』, 京都大学人文科学研究所, 2016 年）ii 頁。
- 33) 例えば、中川文庫 Livres in 8°: 827: Favre, *Les quatre heures de la toilette des dames, poème érotique quatre chants*, Paris, Jean-François Bastien, 1779, 1 vol.; 996: François-René-Jean de Pommereuil, *Contes théologiques, suivis des litanies des catholiques du dix-huitième siècle et de poésies érotico-philosophiques ; ou recueil presque édifiant*, Paris, La Sorbonne, 1783, 1 vol.
- 34) 例えば、中川文庫 Livres in 8°: 688: Vincent Toussaint Beurier, *Conférences, ou discours contre les ennemis de notre sainte religion*, Paris, Charles-Pierre Berton, 1779, 1 vol.; Livres in 12°:

- 134-135: Nicolas Bergier, *Apologie de la religion chrétienne*, Paris, Humblot, 1769, 2 vol.
- 35) 中川文庫 Livres in 12°: 326-328: Engelbert Kaempfer, *Histoire naturelle, civile, et ecclésiastique de l'empire du Japon*, La Haye, P. Gosse - F. Neaulme, 1732, 3 vol.; 中川文庫 Livres in 4°: 1144-1146: Jean Crasset, *Histoire de l'église du Japon*, Paris, François Montalant, 1715, 2 vol.
- 36) Charles Georges Fenouillot de Falbaire de Quingey, *Les Jammabos ou Les moines japonais: tragédie dédiée aux uranes d'Henri IV et suivie de remarques historiques*, p. v.
- 37) Sylvio H. de Franceschi, « Le principe de souveraineté à l'épreuve. Raison du prince et hostilité catholique à la Compagnie de Jésus en France de l'assassinat d'Henri IV aux États Généraux de 1614-1615 », *Europa Moderna. Revue d'histoire et d'iconologie*, 2, 2011, p. 44-60.
- 38) Ruprecht Wimmer, „Japan und China auf den Jesuitenbühnen des deutschen Sprachgebietes“, in Id. und Adrian Hsia (hrsg.), *Mission und Theater: Japan und China auf den Bühnen der Gesellschaft Jesu*, Regensburg, Schnell und Steiner, 2005, s. 17-58; Idem., „Hernán Cortés in der Geschichtsschreibung und auf dem Theater der Jesuiten“, in Karl Kohut (hrsg.), *Von der Weltkarte zum Kuriositätenkabinett: Amerika im deutschen Humanismus und Barock*, Frankfurt a. M., Vervuert Verlag, 1995, s. 231-245.
- 39) Hitomi Omata Rappo, “Japanese Martyrs in French Jesuit Drama (late seventeenth-early eighteenth century). Between Violence and *Bienséance*”, in Haruka Oba *et al.* (eds.), *Japan on the Jesuit Stage: Transmissions, Receptions, and Regional Contexts*, Leiden; Boston, Brill, 2021, p. 87-131. 小俣ラポー日登美『殉教の日本』(名古屋大学出版会, 2023年) 369頁。
- 40) Maria Maciejewskax *et al.*, “Introduction”, in Haruka Oba *et al.* (eds.), *Op. cit.*, p. 3-34.
- 41) Elida Maria Szarota, „Das Jesuitendrama als Vorläufer der modernen Massenmedien“, *Daphnis: Zeitschrift für mittlere deutsche Literatur*, 4, 1975, s. 129-143.
- 42) この出版の経緯と、その相互の内容の関係性については、小関武史「情報の使い回し——ケンペル『日本誌』からからプレヴォ『旅行記集成』へ、さらにラ・アルプ『旅行記集成摘要』へ」(中川久定編『「一つの世界」の成立とその条件』(勸国際高等研究所, 2007年) 35-52頁。
- 43) *Encyclopédie* 8: 444-445.
- 44) *Encyclopédie* 17: 648.
- 45) ファルベールは、『百科全書』と同様に、ジャマボを仏教よりも神道と結びつけている。*Encyclopédie* 15: 219. またシント (Sintos) もしくはシントイズム (Sintoïsme) はジャマボ (Jammabos) を指している。ポール=アンリ・ティリ・ドルバック男爵 (Paul-Henri Thiry Baron d'Holbach, 1723-1789) の記事とされる。
- 46) 会田由ほか監修, アコスタ著, 増田義郎訳注『新大陸自然文化史 下』(岩波書店, 1966年) 215-216頁。これはもともと、ルイス・フロイスの書簡に基づく情報である。同書, 530頁。
- 47) これについては, Hitomi Omata Rappo, « Un voyage dans les terres païennes du Japon imaginaire. La cérémonie dédiée à « Cami » et à « Fotoqué » dans *Chivanus, Bungi rex*, pièce de théâtre jésuite de Carlo Bovio (1614-1705) », dans Andreas Nijenhuis-Bescher *et al.* (dir.), *Frontières et altérité religieuse: La religion dans le récit de voyage XVI<sup>e</sup>-XX<sup>e</sup> siècle*, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2019, p. 197-217.
- 48) 小俣ラポー日登美「偶像崇拜の地・日本——近世フランスの思想家ルイ・リショームの言説から」(『佛教大学 歴史学部論集』第11号, 2021年) 45-65頁。
- 49) 偶像が、単に可視化された具体的な造形物ではないことは、以下に詳細に論じられている。

- Daniel Barbu, *Naissance de l'idolâtrie: image, identité, religion*, Liège, Presses universitaires de Liège, 2016.
- 50) Shin-Ichi Ichikawa, « Les mirages chinois et japonais chez Voltaire », *Raison présente*, 52, 1979, p. 69-84.
- 51) これに関しては、以下を参照のこと。Meng Hua, « Esprit ouvert et mise en valeur de l'altérité: une approche comparatiste dans l'étude du XVIII<sup>e</sup> siècle à la veille du XXI<sup>e</sup> siècle », dans Hisayasu Nakagawa et Jochen Schlobach (dir.), *L'image de l'autre vue d'Asie et d'Europe*, Paris; Genève, H. Champion Diff. Slatkine, 2007, p. 77.
- 52) デイドロと儒教については、以下を参照。J. A. G. Roberts, "Not the Least Deserving. The Philosophes and the Religions of Japan", *Monumenta Nipponica*, 44, 2, 1989, p. 151-169.
- 53) *Encyclopédie* 8: 458.
- 54) *Encyclopédie* 8: 457.
- 55) *Jammabos*, Remarque 10, p. 150.
- 56) Roland Desne, « Diderot et les jésuites », dans Hisayasu Nakagawa (dir.), *Diderot: Le XVIII<sup>e</sup> siècle en Europe et au Japon*, Nagoya, Centre Kawai pour la culture et la pédagogie, 1988, p. 127-138.
- 57) *Encyclopédie* 6: 394.
- 58) *Encyclopédie* 6: 398. これはおそらく入水往生を指している。
- 59) 「1549年、イエズス会のフランシスコ・ザビエルは、キリスト教を広めるための熱烈で美しい情熱によって、この地に導かれた。彼はそこで説教し、人々はそれに耳を傾けたので、キリストはおそらく日本中で崇拜されただろう。使徒という役割は、それ以外の何ものでもない。（もし仮にそうなら）日本では、利権と政治が結びつくことによって、すぐに名誉が傷つけられ迫害が起り、処刑台が組まれ、四方から血が流れることはなかっただろう（…）」 Denis Diderot, « JAPONAIS, Philosophie des », dans *Encyclopédie* 8: 455. Bruno Dubois, *Réalité et imaginaire, le Japon vu par le XVIII<sup>e</sup> siècle français*, Thèse de doctorat, Université de Bourgogne, 2012, p. 430-431.
- 60) J. A. G. Roberts, "Not the Least Deserving. The Philosophes and the Religions of Japan", p. 151-169.
- 61) この過程は、以下によくまとまっている。Pierre Delattre, *Les établissements des Jésuites en France depuis quatre siècles. Répertoire topobibliographique. Vol. 1, Abbeville-Cyriacum*, Enghien (Belgique), Institut supérieur de théologie, 1949, p. 652-654.
- 62) *Jammabos*, p. 166.
- 63) *Jammabos*, p. 36-37.
- 64) この件に関しては、以下を参照。小俣ラポー日登美前掲書, 『殉教の日本』第4・5章。
- 65) Peter Burschel, *Sterben und Unsterblichkeit zur Kultur des Martyriums in der frühen Neuzeit*, München, Oldenbourg, 2004, s. 229-230.
- 66) Christian Biet et Marie-Madeleine Fragonard (dir.), *Tragédies et récits de martyres: en France (fin XVI<sup>e</sup>-XVII<sup>e</sup> siècle)*, Paris, Classiques Garnier, 2009, p. 40-41. これについては、濱田明「ドービニエの日本——『世界史』と『サンシー殿のカトリック告白』を通して」（『Gallia. 大阪大学フランス語フランス文学会』47巻, 2000年）37-43頁。日本語訳は、濱田訳に依拠している。
- 67) Hitomi Omata Rappo, « Japanese Martyrs in French Jesuit Drama ».

- 68) Hitomi Omata Rappo, « Le Japon mis en scène; du Collegio Romano au collège Saint-Michel de Fribourg », in Paul Oberholzer (hrg.), *Die Wiederherstellung der Gesellschaft Jesu. Vorbereitung, Durchführung, Wahrnehmung*, Münster, Aschendorff Verlag, 2019, s. 579-602.
- 69) この件に関しては、小俣ラポー日登美前掲書、『殉教の日本』、379-381頁。殉教に否定的な啓蒙文書としては、例えば以下のような例が挙げられる。野沢協監訳、三井吉俊ほか訳『啓蒙の地下文書1』（法政大学出版局、2008年）513-515頁：「教父と殉教者について」。同『啓蒙の地下文書2』（法政大学出版局、2008年）309-311頁：「殉教者たちの証言について」。
- 70) BPUN, Fonds STN, MS. 1035 (Brouillard C), fol. 202, 205, 206, 210; MS 1003, fol. 22; MS 1027, fol. 96; MS 1028, fol. 120, 182, 234; MS. 1007, fol 213.
- 71) G・E・レッシング著、南大路振一訳『ハンプルク演劇論』（鳥影社・ロゴス企画部、2003年）18頁。Jean-Marie Valentin, « Lessing, critique de Corneille de “Polyeucte et Rodogune” à la théorie de la catharsis », dans Jean-Marie Valentin (dir.), *Pierre Corneille et l'Allemagne: l'œuvre dramatiques de Pierre Corneille dans le monde germanique (XVIII<sup>e</sup> -XIX<sup>e</sup> siècles)*, Paris, Desjonquères, 2007, p. 347-348.
- 72) Ruprecht Wimmer, „Japan und China auf den Jesuitenbühnen des deutschen Sprachgebietes“, p. 30.
- 73) Friedrich Nicolai, *Beschreibung einer Reise durch Deutschland und die Schweiz, um Jahre 1781*, Bd. 4, Berlin und Stettin, 1784, s. 564; Romain Jobez, « Poétique de la violence, d'Opitz à Lessing », *Littératures classiques*, 73, p. 363-373.
- 74) Albrecht Wittenberg, *Die Jammabos, oder die japanischen Mönche, ein Trauerspiel in fünf Aufzügen, aus dem Französischen übersetzt (...)*, Hamburg, Benjamin Gottlob Hoffman, 1782.
- 75) Peter Rietbergen, *Japan verwoord Nihon door Nederlandse ogen, 1600-1799*, Amsterdam, Hotei Publishing, 2003, p. 307.
- 76) Jörg-Ulrich Fechner, „Einführung“, in Jörg-Ulrich Fechner (hrg.), *Matthias Claudius 1740-1815: Leben · Zeit · Werk*, Tübingen, Max Niemeyer Verlag, 1996, s. XVI. ここでタイトルに現れたアスムスはクラウディウスのペンネームである。
- 77) レッシングは、自分の宮廷ではジャマボの類の宗教者のような人物を心配する必要はないと、皮肉を込めて『レ・ジャマボ』に言及したのである。Klaus Bohnen, „Lessing und Claudius vom »Doppelgesicht« der Aufklärung“, in *Op. cit.*, p. 116-117.
- 78) Cecilia Feilla, *The Sentimental Theater of the French Revolution*, Farnham, Surrey; Burlington, VT, Ashgate, 2013, p. 4.
- 79) 中川久定「一八世紀フランス『百科全書』の日本観」（同『啓蒙の世紀の光のもとで——ディドロと『百科全書』』岩波書店、1994年）399頁。
- 80) この二つの日本像の流れについては、拙稿「十七-十八世紀ヨーロッパにおける日本情報と日本のイメージ」（木畑洋一、安村直己編『岩波講座 世界歴史 第15巻 主権国家と革命 15-18世紀』岩波書店、2023年）271-290頁。



## 要 旨

フランス語の演劇作品『レ・ジャマボ、もしくは日本の僧（*Les Jammabos ou les moines japonais*）』（1779）は、作者・出版地の記載されない禁書風の体裁をとった書籍である。しかしこれは、シャルル・ジョルジュ・フヌイヨ・ド・ファルベール・ド・カンジェー（Charles Georges Fenouillot de Falbaire de Quingey, 1727-1800）により執筆され、ヌーシャテル出版協会（Société typographique de Neuchâtel, STN）が印刷したもので、同時代には1200冊以上が売買・頒布され、ヨーロッパ中に広く普及した。この作品のタイトルにあるジャマボは、イエズス会の宣教報告などにおいて頻繁に仮想敵として登場した日本の山伏から取られている。演劇は、表面的にはイエズス会の学校演劇のようにも見えるが、その趣旨は学校演劇とは対極の位置にある。

内容は、朝鮮・中国・日本が並ぶ架空のアジアを舞台とし、宮廷内の宗教的権力者の競争、皇帝の息子たちと美しい姫をめぐる三角関係などが描かれる。権力と財力の掌握を求めて暗躍するのは、偶像崇拜の徒にして山伏のウランカで、儒教を奉じる中国から来た哲人宰相と敵対している。明らかにこの演劇は、同時代の日本の風俗や生活を忠実に再現しようとはしていない。日本という鑑をプリズムとして、実はヨーロッパの宗教者、ひいてはイエズス会のあり方が批判の対象になっている。

かつて中川久定は、『百科全書』内の日本への言及を分析し、18世紀フランスの啓蒙思想家の言説では、欧州内部の宗教や政治体制を批判するために、遠く直接の国交のなかった日本が鑑として用いられるようになったことを指摘した。『レ・ジャマボ』のようなほぼ無名の文士の作品においてもそれは例外ではない。

本研究は、人文科学研究所蔵の中川文庫と、ヌーシャテル公立大学図書館蔵のSTN関連資料を活用しながら、この『レ・ジャマボ』の位置付けを歴史的な視座から試みるものである。

キーワード：イエズス会士、啓蒙、ヌーシャテル出版協会（STN）、百科全書、中川文庫

## Abstract

The French-language play *Les Jammabos ou les moines japonais* (1779) was published without the name of the author or publisher, in the style of prohibited books under the French *Ancien Régime*. However, it was written by Charles Georges Fenouillot de Falbaire de Quingey (1727-1800) and published by the *Société typographique de Neuchâtel* (STN). More than 1,200 copies were sold, and the work was widely distributed throughout Europe. The *Jammabos* in the title is taken from the Japanese Yamabushi, who often appeared as an adversary in Jesuit missionary reports. The play superficially appears to be a Jesuit school play, but its purpose is quite the opposite.

The content is set in a fictional East Asia. The main story takes place in Japan, while Korea and China are also mentioned. It portrays a competition for religious power within the court, and a love triangle between two Japanese princes and a beautiful Korean princess. The main antagonist, Uranka, a Jammabos, is a dark figure who seeks power and wealth. He and his followers are idolaters and hostile to the heroes, including the king's adviser, who is a Confucianist from China. Of course, the play does not attempt to faithfully reflect the customs and lifestyle of contemporary Japan. Using the mirror of Japan as a prism, it is in fact a critique of the Jesuits and the Catholic Church in Europe, who are represented by the monks and Jammabos, while the Confucianists can be seen as referring to the philosophers of the *Lumières*.

Hisasada Nakagawa once analysed the references to Japan in the *Encyclopédie* and pointed out that in the discourse of 18th-century French Enlightenment thinkers, Japan was used as a mirror to criticise the religious and political systems in Europe. This is no exception in the works of almost unknown writers such as *Les Jammabos*.

This study attempts to place *Les Jammabos* in a historical perspective, using the Nakagawa Collection of the Institute for Research in the Humanities as well as STN-related materials in the Bibliothèque publique et universitaire Neuchâtel.

**Keywords:** Jesuits, Enlightenment, Société typographique de Neuchâtel (STN), Voltaire, Encyclopédie, Nakagawa Collection